



セミはどうしてすぐ死ぬの

セミは、おとなの時期が短い

夏、元気に鳴いているセミをつかまえてきて、飼育ケースに入れ、しばらく飼ってみようとしても、たいてい、すぐ死んでしまいます。なぜでしょうか。

よく見るアブラゼミは、卵からかえって死ぬまでに、6年以上も生きています。でも、その大部分は、暗い土の中で、木の根のしるなどを吸って生きている幼虫時代になります。

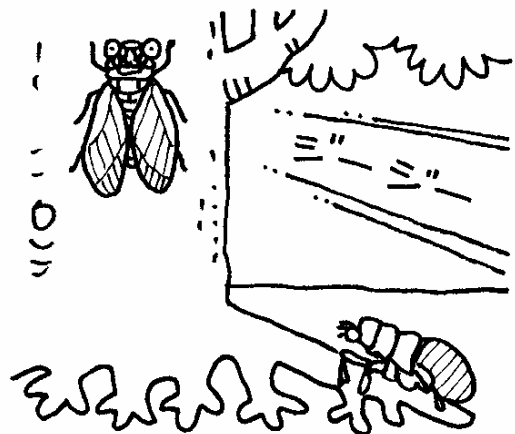
セミの卵は、木の幹に産み付けられます。卵からかえった幼虫はすぐ土にもぐり、何回も殻をぬいで大きくなり、アブラゼミなら5年間土の中において、やっと地上に出てきます。最後の殻をぬいで、おとなのセミになったら、10日～2週間で死んでしまいます。

おとなのセミは、卵を残すのだけが仕事

親になったセミは、いそいで子孫を残す仕事をしなければなりません。そのため、オスのセミは、メスを探したり、呼び寄せるのに必要な、飛ぶこと、大声で鳴くことだけにつごうがよい体になっています。メスも、飛ぶことと、卵を産むことだけにつごうのよい体になっていて、長生きするようにはつくりされていないのです。あとは、生きていくために、木のしるを少し吸うことができるだけです。

セミの種類によっては、17年間も、土の下で幼虫時代をすごすものもいます。

(監修・中山 周平)



セミの親と幼虫

